

## スタンダールとスペイン I

—— スペイン、もう一つの《オリエント》 ——

井 出 勉

スタンダールとスペインとの関係は、スタンダール関係の多岐にわたる研究の中でも、決して十分に研究され尽くしているとは言えない。それらの研究は、とりわけ大伯母エリザベットから受け継いだ《エスパニョリズム》を論じたもの、『ル・シッド』や『ドン・キホーテ』の読書、さらにはサン・レアルの影響などに関する考察が中心となっている<sup>(1)</sup>。近年出版された『スタンダール辞典』でも、スペインに関するメリメの影響を指摘するのを忘れてはいないが、《辞典》という性質上、「ESPAGNE, ESPAGNOLS, ESPAGNOLISME」という項目は、内容豊かではあるが、わずか2ページほどである<sup>(2)</sup>。しかしながら1804年に三幕もののオペラ『ドン・カルロス』を計画したこと、1821年から始まったメリメとの親交、1829年に行った未だ詳細が明らかになっていない《スペイン旅行》、その後加筆し1830年5月に発表された『箱と亡霊 — スペイン奇談』や、同年6月の『惚れ薬 — シルヴィア・マラペルタのイタリア文にならいて』などは、スタンダールとスペインとの関わりが無視できないことを示している。さらにはこの時期の旅行や創作活動が19世紀の他の作家たちと同様に1830年という重要な節目の年へと収斂していくことを見逃してはならない<sup>(3)</sup>。

スペインが「小説家スタンダール」にとって幼年期からの《幻想》を育んできた地であることは、とりわけ『アンリ・ブリュラーの生涯』(1835-1836年)を繙けば明らかである。だが、「それはル・シッドのよう

に美しい<sup>(4)</sup>」という大伯母エリザベットの言葉に集約される幼年期以来のスペイン《幻想》には目が向けられても、1830 年以降、小説家として成熟していくスタンダールにとって、作品の中でスペインが単なる《幻想》の地以上になっていく過程は、研究者の目を逃れているように思われる。そしてその《幻想》の地スペインは、スタンダールにとって《幻想のオリエント》の一部でもあり、スタンダールが愛したイタリア的エネルギーの発露をスペイン的なものの中にも見いだすことができる<sup>(5)</sup>。このことはスタンダールにとって、後述するように、スペインが広義でのオリエントやイタリアにつながる重要な地であることを明らかにしているように思われる。19 世紀前半のスペインブームが諸芸術にどのような影響を与えているかを再検討し、スタンダール最晩年の未完の作品『ラミエル』(1839-1842 年執筆)とメリメの『カルメン』(1845 年)の作品比較を通して、『ラミエル』とスペイン、隠されているラミエルの《ジプシー》的性格<sup>(6)</sup>を剔出するには稿を改めるとして、今回はスタンダールの小説作品において、どのようにスペインが題材として作品の中に取り入れられたかを検討し、こうしたスペイン受容の過程が、ほぼ同時期に書かれた短篇 2 作品の『箱と亡霊』、『惚れ薬』の中に、他の作品以上に集約されていることを中心に論じたい。

## I. スタンダールとスペイン

スタンダールにとってスペインという国はどういう意味を持っていたのか。まずナポレオンと彼が引き起こしたスペイン独立戦争も大きな影響を与えたことは疑いがない。スタンダール自身、『ナポレオンの生涯』(1817-1818 年執筆)で逆説的に、「スペイン戦役を除けば、彼(=ナポレオン)は侵略者ではなかった<sup>(7)</sup>」と述べているが、「スペイン戦役がナポレオンの力の衰退の時期と同時に彼の天才の衰退の時期を示している<sup>(8)</sup>」こともまた事実である。以下に歴史的事実を確認しておこう。この時期のスペインは、モームの愛惜する、セルバンテスやエル・グレコのいた「黄金世紀」は遙か昔、動乱の時代であった<sup>(9)</sup>。

当時のスペインでは、政治の実権は国王カルロス 4 世にはなく、王妃マリア・ルイサとその愛人である宰相ゴドイの手に委ねられていた。それに対抗し、政権を奪取する機会をうかがっていたのが、国王の長男フェルナンドとその一派である。両者の対立は、カルロス 4 世がフェルナンドを逮捕してから、激化する一方だった（フェルナンドはその後釈放された）。スペイン王家の争いを知ったナポレオンは、この機会を利用してスペインをフランスの支配下に置こうと考えた<sup>(10)</sup>。

ナポレオンもこの時点では、スペイン支配を夢見ていた己の野望が、自分自身とフランスの悲劇への序章となるとは思いもしなかったであろう。

フォンテーヌブロー条約でスペイン内の軍隊通過権を得たナポレオンは、ポルトガル制圧を口実に 1807 年秋から翌年春にかけて約 10 万の軍隊を進攻させて、それらをスペイン北部・中央部の主要諸都市に駐屯させていた。総司令官であったミュラーは、アランフェス暴動の知らせを受けるやマドリードに向かい、3 月 23 日にこれを占領した。新国王となったフェルナンドは、ゴドイの専制に反発していた民衆の期待を集めていたが、ナポレオンの同意なくしては王冠の安泰は不可能であった。そこで彼は、ミュラーの進言に従って、ナポレオンとの会見に臨むためにフランス南西部の町バイヨンヌに赴くことにした。他方、退位を強制されたカルロス 4 世も、ナポレオンの支持を得て復位しようとしており、やはりバイヨンヌに向かった。しかしながらナポレオンの決断は、王冠を争う父子のそれぞれの意志に反して、両者にスペイン王位を放棄させて、代わりに自分の兄ジョゼフをホセ 1 世として即位させることであった<sup>(11)</sup>。

果たしてナポレオンは、ナポリ国王であった兄のジョゼフを新しいスペイン国王ホセ 1 世として即位させ、6 年間にわたるスペイン独立戦争が幕を開ける。スペイン国民は激しく抵抗し、各地でゲリラ戦を展開し、「侵略者」ナポレオンは血みどろの戦いを強いられる。結局「1813 年にフラ

ンスがスペインの支配権を失うまで、スペイン国民の激しい抵抗はつづき、ナポレオンの輝かしい経歴に汚点を残すことになるのである<sup>(12)</sup>」。

確かに、ナポレオンとそのスペイン戦争（1808-1813）は、スタンダールの作品の多くに影を落としている。

『恋愛論』（1822年）では、ナポレオンに抵抗した15世紀的な（中世的な）スペイン人の性格を18世紀的なフランス人のエスプリと比較した上で<sup>(13)</sup>、『イタリア年代記』で中世のイタリア人のエネルギーを賛美したスタンダールらしい評価を与える。

スペインは、私が一つの比較をするのに大いに役立つ。このナポレオンに抵抗し得た唯一の国民は、絶対に愚劣な名誉心をもたず、名誉心のなかにある愚劣なものももっていないように思われる。

『恋愛論』第47章「スペインについて」<sup>(14)</sup>

さらに、『箱と亡霊』でも「ナポレオンを相手どってのあの崇高な戦い (cette guerre sublime)<sup>(15)</sup>」をおこなったが故に、「19世紀のスペイン人は後世ヨーロッパのあらゆる他の民族の上位におかれ、フランス人について第2位をあたえられるだろう<sup>(16)</sup>」とまで言わしめる。『パルムの僧院』（1839年）においては、この戦いに加わったおかげでモスカは、立派な出生証明を得ているのと同じことになる。時代遅れの髪粉をつけていることを揶揄されながらもジーナから「あなたのようにまだお若くりっぱな方が、スペインへ行って私たちといっしょに戦争までしていらした方が！<sup>(17)</sup>」と言われ、「（パルムの）大公が扱いやすい下等なラッシよりモスカが好きなのは、彼が軍人でスペインで幾度も拳銃を手に命の瀬戸ぎわを潜ったことがあるからです<sup>(18)</sup>」という評価も得ている。

また後述する、スペインを舞台とした短編小説『箱と亡霊』、『惚れ薬』以上に読者の注意を引くのが、『赤と黒』（1830年）におけるスペインへの言及である。前述の『パルムの僧院』と同じく、やはりスペインは、登場人物の出自に一種のアウラを与える。

『赤と黒』は、「小さなヴェリエールの町は、フランシュ＝コンテでいち

ばん美しい町の一つに数えられよう<sup>(19)</sup>」と言う書き出しで始まる。さらに、すぐ後に「昔スペイン人が築いた城の廃墟の、数百尺下のあたりを、ドゥー川が流れている<sup>(20)</sup>」という記述が続く。『赤と黒』第1部は、ジュリアンが生まれた町、フランシュ＝コンテ地方の《架空の町》ヴェリエールを舞台として展開する<sup>(21)</sup>。フランシュ＝コンテ地方は、1556年以来スペインのハプスブルグ家のものであったが、1678年にルイ14世に割譲されている<sup>(22)</sup>。その中心都市（首都）が、ジュリアンがヴェリエールを離れて神学校に入る町ブザンソンである。ジュリアンの父である老ソレルに代表される人々の表情についても、「スペインの統治下では奴隷だったから、いまだにエジプトの農奴のような顔つきが残っている<sup>(23)</sup>」と形容される。《エスパニョリズム》に支配されているジュリアンは、時として、作者同様、「女とふたりきりのとき、男はなにをいうべきかということで、彼の頭は、ひどく大げさな、スペイン的な考え方でいっぱいになり (remplie des notions les plus exagérées, les plus espagnoles), おろおろしてしまって、とんでもない想像しかできない<sup>(24)</sup>」という状態に陥る。この場面は、容易に『アンリ・ブリュラーの生涯』の「大祖母エリザベットによって伝えられたスペイン風の感情は私を空高く舞いあがらせ、私は名誉のこと、英雄的行為のことしか考えなかった<sup>(25)</sup>」(第21章)という記述を想起させる。さらに、「第一、私のスペイン主義 (mon espagnolisme) のために。この欠点は1830年にもなおのこっていて、フィオリもこれを認め、トゥキュディデスの句を引用して言った——「君は綱をあまり高く張りすぎる」<sup>(26)</sup>」(第31章)という一文は、カステックスの指摘を待つまでもなく、幼年期から『赤と黒』が出版された時点(1830年)においても、スタンダールが《エスパニョリズム》を失わずにいたことを示している<sup>(27)</sup>。もっともスタンダールの同時代の読者であれば、「ひどく大げさな、スペイン的な考え方」から連想するのは、コルネイユの『ル・シッド』か、おそらくは、セルバンテスの『ドン・キホーテ』の憂い顔の騎士であろうし、スタンダール自身の意図もそうであると考えるのが自然であろう。本論では、スタンダールのネオロジスムである《エスパニョリズム》(espagnolisme) が含意する「英雄主義、崇高さ、高揚、魂の偉大さ<sup>(28)</sup>」を軽んじる訳ではない

が、すでに言い尽くされた感のある、スタンダールのスペインと言えは《エスパニョリスム》という方程式に改めて深く踏み込むつもりはない。もちろん《エスパニョリスム》もスタンダールとスペインの関わりを読み解く重要なフィルターの一つであることを否定するものではない。その先にスタンダールが見いだしたものを読み解こうという試みである。

舞台が、ヴェリエールからフランシュ＝コンテの首都ブザンソンに移ると、ブザンソンに出てきたジュリアンは神学校に行く前に、ブザンソンの城塞を訪ねる。

1674年の包囲戦の歴史で頭がいっぱいだったので、神学校に閉じこもる前に、城壁や城塞を見ておこうと思った<sup>(29)</sup>。

先述したように、1674年当時は、スペイン領であり、ブザンソンはルイ14世によって27日間にわたって包囲された<sup>(30)</sup>。この章では「1674年の包囲戦」と言う表現でしか、スペインとの関わりには言及されていないように感じられるが、出自ということであれば、当時の読者にとって、ブザンソンが、『赤と黒』の出版の年にかの「エルナニの戦い」でロマン主義の幕を明け<sup>(31)</sup>、1831年には『秋の木の葉』で自らその誕生を謳う詩人（文豪）ヴィクトル・ユゴーの生誕地であることも周知の事実であろう<sup>(32)</sup>。

『赤と黒』ではさらに、「才気もあれば、勇気もあり、スペイン戦争にも行ったことがある<sup>(33)</sup>」ラ・モール侯爵の息子、若きノルベール伯爵にとって、スペインはその出自とともに品行方正を証明するものとなる<sup>(34)</sup>。その一方で、ジュリアンを攻撃する取り巻きに対して、マチルドもジュリアンの空想上の出自で対抗する。

「明日にでもフランシュ＝コンテの山のなかの、ある田舎貴族が、ジュリアンを自分の私生児だと認めて、家名と数千フランのお金をおくったら、ジュリアンだって、6週間もすれば、あなたがたご同様口ひげを生やしているわ。6ヵ月後には、あなたがたご同様、軽騎兵将校よ。そのときには、あのひとの性格の偉大なところが、もう滑稽ではなくなるわ。

未来の公爵さん、あなたは田舎貴族にたいする宮廷貴族の優越性という、使いふるしのへたな理由をもち出すより仕方がないわね。でも、わたしがあなたをもっと困らせる気になったら、どうなさるおつもり？ 意地悪く、ジュリアンの父親は、ナポレオン時代に、ブザンソンで捕虜となっていたスペインのある公爵だとしたらどう？ その公爵が、死の床で、良心の呵責から、ジュリアンを息子と認知したとしたら、あなたはどんなさるの<sup>(35)</sup>？」

ジュリアンをスペインの公爵の落胤とまで想像の翼を広げるマチルドは、その後、ジュリアンへの恋心に突き動かされ、運命的な手紙を書いた自らの行いを振り返って懊悩する。その脳裏には、かつてジュリアンが教えてくれた行動規範が蘇る。

それに、口にするさえいまわしいことなのに、それを筆にするとは！ 書いてはならないことがあると (Et encore parler était affreux, mais écrire ! *Il est des choses qu'on n'écrit pas*), ナポレオンは、バイレーンでの自軍降伏の報告を受けて、叫んだではないか。それもあらかじめ教訓を授けるかのように、この言葉を教えてくれたのは、ジュリアンだった<sup>(36)</sup>。

ここでいうバイレーンとはナポレオンがスペイン戦役での最初の運命的な敗北を喫した戦いである<sup>(37)</sup>。

ジュリアンとの関係を知った怒れるラ・モール侯爵においても、マチルドが思い描く、スペインの公爵の私生児というジュリアンの想像上の出自と同じく、やはりスペインが侯爵の想像力に入り込む。

ジュリアンに、どこか自分の領地の名を名のらせよう。自分の爵位を彼に継がせてもいいではないか。義父のショーヌ公爵は、一人息子をスペインで殺されて以来、自分の爵位をノルベールに譲りたいと、繰り返していた……<sup>(38)</sup>

『赤と黒』においては、さらに負の価値を背負わされたスペイン人が登場することもあることを付け加えておきたい。一旦ジュリアンとの関係を結んでしまうと、とたんに冷淡になった気位の高いマチルドの心を再び得るために、ジュリアンはフェルヴァック元帥夫人に言い寄る。その際、かつて元帥夫人に言い寄ったことのある「すぐれた炭焼き<sup>カルボナーロ</sup>黨員<sup>(39)</sup>」のドン・ディエゴ・バストスなる人物の助言を仰ぐ（バストスは、この章で、スタンダード的笑いを体現する人物としてその役割を果たすことになる）。ここでは『恋愛論』でも取り扱った、恋愛の六つの気質のうち多血質、胆汁質、粘液質が取り上げられる<sup>(40)</sup>。

「(…) 夫人（＝フェルヴァック元帥夫人）には、天才につきものの、あらゆる行為に情熱の輝きを添える胆汁質の気質があるとはみえません。むしろ逆に、オランダ人のように、冷静な粘液質型のひとで、だからまたあのたぐいまれな美貌と、あのみずみずしい色艶を保っていられるのでしょう」

ジュリアンは、このスペイン人（＝バストス）の悠長さとびくともしない粘液質的気質とにいらいらしてきた<sup>(41)</sup>。

ガルニエ版校訂者のカステックスによれば<sup>(42)</sup>、この人物像の造形には、1825年の3月1日にフランス座で初演された、ピエール・アントアヌ・ルブラン（1785-1873）の悲劇、『アンダルシアのル・シッド』の登場人物ドン・バストスがもとになっているとのことだが、この章自体『赤と黒』の本筋に大きな影響を与える章ではなく、バストスもフェルヴァック夫人の性格を明らかにするほんの端役としての役割を与えられているにすぎない。もっとも、『ラシーヌとシェークスピア』第2部（1825年）でも、『アンダルシアのル・シッド』を、バストスがスペイン王を杖で殴る場面の故に検閲に長い間ひっかかった作品としてあげているように<sup>(43)</sup>、同時代の注意深い読者に向かって、よりスペインを意識させる目配せとも受け取ることができる。ベランジェを容易に想起させる件もあり、作品の同時代性に鑑みるに興味深い一章ではある<sup>(44)</sup>。



ここで、スタンダールが生涯に只一度行った、詳細が分かっていない《謎のスペイン旅行》に話を戻そう（只一度と書いたが、実際にはスタンダールは、1838年に「バスク地方のスペイン国境への非常に素早い侵入<sup>(45)</sup>」(une très rapide incursion à la frontière espagnole du pays basque)をおこなっているが、これは本当に文字通り一時的な「侵入」に過ぎない)。鈴木昭一郎作成の「年譜」<sup>(46)</sup>によれば、1829年9月8日スタンダールは、パリを出発しボルドーに向かう。9月リブルヌ。9月ボルドー、トゥールーズ、カルカッソンヌ、フィギエール、バルセロナ。9-10月モンプリエ、10月グルノーブル、クレ、サン＝ティミエに滞在。10-11月マルセイユ滞在。11月末パリ帰着、となっている。この日程は、ロベール・ヴィニユロンの指摘以来、アンリ・マルチノの『スタンダールの暦』(Le Calendrier de Stendhal)でも支持し採用している<sup>(47)</sup>。しかしながら『赤と黒』の創作過程について緻密な再検証を行った高木信宏は、以下のスタンダールの覚え書きを再検討している<sup>(48)</sup>：

セート、月曜から金曜日の晩、すなわち1829年10月16日まで。

22日、マルセイユ発。

24日、土曜日、リヨンにて5時に美しい太陽。

25日、日曜日、蒸気船。深夜、シャロン着<sup>(49)</sup>。

高木は、16世紀フランスに「悲劇的物語」(Histoires tragiques)流行の先鞭をつけ、イギリス(シェイクスピア)やスペイン(ロペ・デ・ベガ、セルバンテス)などでも広く読まれ、文字通り汎ヨーロッパ的な影響を与えた「イタリア年代記」の作者マッテオ・バンデッロ『ノヴェッレ』の余白に書き残されたこの旅程のメモの信憑性を確認し(『赤と黒』の創作時期を特定するのに、このメモの重要性に最初に着目した栗須公正の指摘を別角度から検討している<sup>(50)</sup>)、「作家は月曜、つまり10月12日から16日まで南仏の港湾都市セートに滞在し、17日ないし18日から22日までマルセイユにいたことになる<sup>(51)</sup>」とし、「マルセイユを発ったスタンダールはリヨンからシャロンまで航路で北上しており、グルノーブルに立ち寄っ

たと見なすにはその言及もなく、また日程的にも不可能だ<sup>(52)</sup>」と結論づける。それゆえ「はたしてグルノーブル滞在はじっさいに1829年のスペイン・南仏旅行中にあったのであろうか<sup>(53)</sup>」とこれまでの旅程に疑義を挟む。本論はスタンダールとスペインの関わりについて論じるものであって、この小旅行でスタンダールが故郷のグルノーブルに立ち寄ったかどうかということは、もちろん論旨には関係がない。しかしながらこの栗須、高木両名の指摘を註の形でなく本文に組み入れたのは、繰り返すが、この南仏とスペイン旅行については詳細が分かっておらず、旅行の目的も研究者の推測の域を出ないからである<sup>(54)</sup>。したがって、将来新たな資料の発見によって、1829年のバルセロナ行きの詳細が判明するやもしれない。その時新たな読解が可能になるとしても、現時点での資料から判る限りにおいて、この短い一度と言ってもよいスペイン訪問がスタンダールのイマジネールにおいてどのような影響を残したのか。スタンダールが残した作品の中にその痕跡を探し、スタンダールの中でスペインがどういう存在であったのかを丹念に検証していきたい。

1829年の「小旅行」ののち、約10年後の1838年の3月にスタンダールは、パリから再びボルドーへ向かい、スペイン国境の地まで足を運び、南仏各地を経巡り、スイス、ドイツ、オランダ、ベルギーまでに及ぶトータルで「136日間、約5,000キロの旅<sup>(55)</sup>」をおこなっている。1838年の南仏を中心とした大旅行は、『南仏旅日記』(*Journal d'un voyage dans le midi de la France*)として読むことができる<sup>(56)</sup>。この年の旅行の日程も、前述の鈴木「年譜」によれば、1838年4月16日バイヨンヌ着、17日バイヨンヌ発、サン＝ジャン＝ド＝リュス、ベオビー、イルン、フォンタラビー。18日ベオビー経由バイヨンヌ帰着、アンデー。19日バイヨンヌ発となっている<sup>(57)</sup>。実質2日で国境の町バイヨンヌを起点とした足早のスペイン「侵入」を果たしている。短い時間とはいえ『南仏旅日記』の分量から言えばかなりの量をスペイン国境の町の記述に割いている<sup>(58)</sup>。このときのスタンダールの心情は、イルンで引き起こした痛風の痛みにもかかわらず、「好奇心で一杯だった<sup>(59)</sup>」(*j'étais tout à la curiosité*)と言う表現に凝縮されているように思われる。1829年9月のスペイン「小旅行」より

も今回のスペイン「侵入」の方が印象が強かったのか、前回の「小旅行」について詳述したくないがゆえの煙幕なのか、「1828年9月に、私はこれと同じ道筋をたどったことがある。恐怖政治（バルセロナのスペイン伯爵による）を見物に行くのが目的だったが、日記をつけずにいたので、はっきりした記憶が全然ない。当時の愉快な感じだけが残る<sup>(60)</sup>」と回想している<sup>(61)</sup>。スタンダールの関心をひいた当時のスペインは動乱の中にあった。スペイン独立戦争により、ナポレオンが敗退し、1814年フェルナンド7世は復位し、絶対君主として自由主義者への激しい弾圧を開始する。しかし経済的危機が深刻化するにつれてフェルナンドの政策は破綻し、1820年1月にアンダルシアでリエゴによるクーデタの後、自由主義の3年間を経験するも、「スペインにおける革命の進行とその近隣諸国への波及を恐れたウィーン反動体制下の列強は、同年末（＝1822年末）のヴェローナ会議でスペインへの直接干渉を決定した。これに基づいてフランスは、翌年4月に「聖ルイの10万の息子たち」と呼ばれる軍隊を半島に投入した。自由主義政府は、これに対する民衆の抵抗を殆ど呼び起こすこともできずに屈服し、同年10月にフェルナンドは再び絶対君主に戻ることを宣言した<sup>(62)</sup>」。かくしてフェルナンド7世は「忌むべき10年間」（1823-1833年）と呼ばれたものを開始し、再び自由主義者たちを厳しく弾圧する<sup>(63)</sup>。しかし、マリア・クリスティーナとの4度目の結婚に端を発して、事態が大きな展開を見せる。

だが、フェルナンドが1829年にナポリ出身のマリア・クリスティーナを4度目の妻に迎え入れ、翌年に後のイサベル2世が誕生したことで、事態は大きく変化した。国王は、イサベルを王位継承者とするために、1789年の議会で承認を受けたものの公にされずに放置されていた国本詔勅を発布した。これによってブルボン王朝成立時（1713年）に廃止された女子の王位継承権が復活した。王弟カルロスに次の国王を期待していた絶対主義者は、詔勅の撤回を画策して失敗すると、武力による解決に向かって党派を結束していった。これに対抗して王妃は、娘イサベルの王位継承権を守るために自由主義者の勢力を味方に引き入れること

を決心し、自由主義政治犯の釈放などを行った。1833 年 9 月にフェルナンドが死去してイサベルが即位し、マリア・クリスティーナが摂政になると、カルロス支持派（カルリスタ）は全国で反乱を起こした<sup>(64)</sup>。

カルリスタ戦争の 7 年間（1839 年 8 月終結）を含む、マリア・クリスティーナの摂政期は「ラ・グランハ暴動に起因する進歩的一時期を除いて、穏健的傾向<sup>(65)</sup>」であったようだが、スタンダールが「侵入」した 1838 年 4 月においても不穏な空気が流れていたことには違いない。

スタンダールにとってのスペインは、幼年期を端緒として、ナポレオンを軸にし、さまざまな伝聞をもとに形作られ、1829 年に初めてその地を踏むまでスタンダールの想像界で育まれてきた。ヴィニユロンの言を俟つまでもなく、1829 年の 11 月末にパリに戻るやいなや、スタンダールはスペインを作品の舞台に乗せる<sup>(66)</sup>。それが、1830 年に『ルヴュ・ド・パリ』誌に相次いで発表される『箱と亡霊——スペイン奇談』（1830 年 5 月）と『惚れ薬——シルヴィア・マラペルタのイタリア文にならいて』（1830 年 6 月）である。

## II. 『箱と亡霊』、『惚れ薬』におけるスペイン

『ルヴュ・ド・パリ』誌はオペラ座の支配人にもなるルイ＝デジレ・ヴェロンことヴェロン博士（ドクトゥール・ヴェロン）〔1798-1867〕によって 1829 年 4 月に創刊された。ヴェロン博士とスタンダールとの関わりについては、前述の高木が「『ジュリアン』のアイデア」<sup>(67)</sup>の中で、改めて詳述しているので、ここではスタンダールとスペインに関連する事柄のみを取り上げてみたい。もっとも、ヴェロン博士とスタンダールの絡みは、『ルヴュ・ド・パリ』誌を中心にこれまで論じられてきたくらいがある。しかし、雑誌経営に飽きたらず、オペラ座支配人へと転身するヴェロン博士が<sup>(68)</sup>、当時のオペラ座のスター、マリー・タリオーニの対抗馬としてロンドンから引き抜いたファニー・エルスレール（英語の発音ではエルスラー）が《スペイン舞踊》、「カチューチャ」で人気を博したことや、その

彼女を『リュシアン・ルーヴェン』(1834-1835 年)において実名で登場させたスタンダールの意図はスペインとのつながりを考える上で非常に興味深い。とりわけ、オペラ座の踊り子の瘦身傾向を嘆いていたスタンダールにとって、ロマンチックバレエの代名詞とも言えるタリオーニの《フラジール》な姿よりも大柄で健康的な官能性を体現したエルスレールの方がお気に入りであったことは容易に想像できる(さしずめ現代ならば、スーパーモデルの極端な瘦身ぶりに警鐘を鳴らす人々の共感を得たであろう)。それゆえヴェロン博士とスタンダールとの関わりを『ルヴュ・ド・パリ』誌だけでなく、オペラ座の支配人としてのヴェロン博士の果たした役割をもあわせて読み解くことも必要な作業であると考えられる<sup>(69)</sup>。

スタンダールは、『箱と亡霊』、『惚れ薬』の前に、『ヴァニナ・ヴァニニ、あるいは法王領において発見されたる、炭焼党最後の集会にかんする顛末』を 1829 年 9 月のスペイン「小旅行」の後に書き上げ、1829 年 12 月 3 日にヴェロン博士に原稿を送っていることが、『日記』の記述から分かっている<sup>(70)</sup>。『ヴァニナ・ヴァニニ』はその副題からも推測できるように舞台はイタリアである。「182\*年の春のある晩だった<sup>(71)</sup>」という書き出しで始まるこの作品では、ヒロインのヴァニナが、ブロンドのイギリス美女たちの中にあっても、ひときわ目をひくローマ人女性であり、そのローマ人たる出自は、「目の輝きと漆黒の髪<sup>(72)</sup>」が証明していたと書かれている。しかし一方では、1831 年に書かれたとされている 1726 年のローマを舞台とする『サン・フランチェスコ・ア・リパ』(死後、1853 年、『両世界評論』誌に発表<sup>(73)</sup>)では、ヒロインとなる、かつてスペインの貴族を恋人に持ち、今はフランス人セヌッセと恋愛関係にあるカンポバッソ夫人は、美しいブロンドの髪と藍色(bleu foncé)の目をした美女として描かれている<sup>(74)</sup>。『ヴァニナ・ヴァニニ』とは違い、同じローマ人美女でも、黒髪ではなく「彼女はすべての女性が褐色の髪であるという国においてブロンドである、つまり大変な特色だ<sup>(75)</sup>」とされているのだ。スタンダールは、黒髪にせよ褐色の髪にせよ、髪の色でイタリア人女性の情熱の典型的な特徴を描出している。このローマ人美女ヴァニナが、当初若い美女と見誤り、愛することになる炭焼党員ピエトロ・ミッシリリは、ブロンドで青い目を

している<sup>(76)</sup>。もちろんスタンダール自身がオペラでのこうした取り違えを好んだという事実があるにしても<sup>(77)</sup>、ヒロインをあえて、黒髪の美女にして（燃えるような目とは形容されても目の色については特に言及されていないが、目の色も褐色あるいは黒ではないだろうか）、逆に炭焼党員のミッシリリを女性的で華奢な感じを与える青い目でブロンドの青年にしている点は興味深い。ヴァニナはローマ人女性という設定なので、黒髪であっても（『サン・フランチェスコ・ア・リパ』のカンポバッソ夫人のように褐色であっても）不自然ではないが、スタンダールの主要な小説作品の女主人公が、ヴァニナ以外に「黒髪」で描かれる事はない<sup>(78)</sup>。確かにスタンダールの 2 大小説『赤と黒』や『パルムの僧院』や未完とはいえ大部の『リュシアン・ルーヴェン』にはその美を競う二人のヒロインが登場する。他の作家であれば、たとえば、ウィルキー・コリンズの『白衣の女』の外見も性格も異なる姉妹など典型であろう。その活動的で男性的な力にもあふれている姉には「濃い、真っ黒な髪の毛は、異常にも額近くまで生えていた<sup>(79)</sup>」とされている。バルザックも髪の色と性格を連動させて描き分けた作家の 1 人である。村田京子は「『人間喜劇』に登場する豊かな黒髪の女性は、オリエンタ的なイメージで捉えられ、官能的で、愛する男に尽くし、自己犠牲も惜しまない。それに対して、ヨーロッパ的な金髪の女性は知性的で、愛情よりも自分の理想を優先することがしばしばである、といったように。バルザックは、髪の色で登場人物の性質を西欧と東方に分け、描き分けていたのである<sup>(80)</sup>」と指摘しているが、このことが前述したようにスタンダールにすべて当てはまるわけではない。というのはスタンダールの場合、主要な登場人物であっても、髪の色や目の色を具体的に描写せず（その美しさや輝きについては述べても色については明言していない）、読者の想像力に任せている。こうした描写の仕方はすでに最初の小説『アルマンス』に見られる。ロシアを出自とするアルマンスは、アジア的な顔立ちをした青い目の美女ではあるが<sup>(81)</sup>、その髪の色は具体的には描かれず、周囲の目をひくモスクワ流の髪型のみ言及される<sup>(82)</sup>（一方、オクターヴの方は際だつ黒い目と美しいブロンドの青年である<sup>(83)</sup>）。『赤と黒』においても、読者は、レーナル夫人の美しさは理解しても、目や髪の色が何色であ

るかは最後まで知ることがない。それに対してマチルドは素晴らしいブロンドで天上のごとき (celeste という形容詞を使っている) 青色の目をしている<sup>(84)</sup> (この2人に愛されるジュリアンはというと、大きくて黒い目と濃い栗色の髪をしている<sup>(85)</sup>)。『パルムの僧院』でも、クレリアが銀白色の (形容詞は cendré) ブロンドであることを教えてくれるだけで<sup>(86)</sup>、サンセヴェリーナ公爵夫人の方は、目の色も髪の色も、その美しさは観念的に描写されるが、具体的な記述はない<sup>(87)</sup>。『リュシアン・ルーヴェン』では、シャストレール夫人もグランデ夫人もともにブロンドである<sup>(88)</sup>。スタンダールと色についての研究は、もちろん『赤と黒』のようにタイトル自体が暗示的であり、研究者の関心を引くものであり、ジャン＝ポール・ヴェーベルのテーマティックな研究や近年のシェリル・M・ハンセンの『スタンダールの作品における色の象徴的意味——青と緑』なども興味深い研究ではあるが、特に登場人物の髪の色に焦点を当ててはいない<sup>(89)</sup>。黒髪のヒロインという点においても《異質》なヴァニナに、前述の村田京子がバルザックで指摘した、「オリエンタ的なイメージ」を見るかどうかはともかく、1829年の時点でのスタンダールの中では、1836年以降『イタリア年代記』諸篇にみられるイタリア的なものとスペイン的なものは同一の次元においてしかるべきであると思われる。それゆえ黒髪のヴァニナの欲しいものを手に入れるためには手段を選ばない性格とその行動は、すでにメリメのカルメン像を予告しているように思われてならない。単純に北方系 (ブロンド)、南方系 (黒) という分類の仕方だけではなく<sup>(90)</sup>、スペイン帰国後に、南方であるローマ人のヴァニナに、スタンダールの作品唯一と言っていい黒髪をまとわせたスタンダールの意図に1829年のスペイン「小旅行」が影響を与えていなかったと言えるだろうか。このテーマについては、稿を改めて論じたい<sup>(91)</sup>。

『ヴァニナ・ヴァニニ』の後に書かれた『箱と亡霊』、『惚れ薬』では、スペインは直接的な形で作品に取り込まれている<sup>(92)</sup>。

1830年5月に発表された『箱と亡霊』は、《スペイン奇談》(aventure espagnole) という副題からもわかるように、物語の舞台はスペインのグラナダである。当時の読者は、グラナダといえば、ギリシャ、コンスタン

チノーブル、カルタゴ、スペインを旅行し、『パリからエルサレムへの旅』(1811 年)を著したシャトーブリアンが、グラナダのアルハンブラを「19 世紀初頭のロマン主義的視点<sup>(93)</sup>」から眺めた、『アバンセラージュ家末裔の冒険』(1826 年)を容易に想起したのではないか<sup>(94)</sup>。時代は 1492 年のグラナダ陥落後とはいえ、スペイン人によってグラナダから追放されたムーア人の末裔である主人公アベン＝ハメットとル・シッドの子孫ブランカ嬢との悲恋。スタンダールが嫌ったシャトーブリアンの文体はともかく、その主題は、19 世紀初頭以来のオリエン트ブームを十分に意識されたものであり、わずか 3 年後に同じカルタゴを舞台にした『箱と亡霊』を書いたスタンダールの関心を引くものであったことは十分に察知できる<sup>(95)</sup>。しかも前述した前作の『ヴァニナ・ヴァニニ』が「182\* 年の春のある晩だった<sup>(96)</sup>」と始まるように、「182\* 年 5 月のある晴れた朝に<sup>(97)</sup>」という書き出しで始まる。後述する『惚れ薬』もまた同じように「182\* 年の夏の暗く雨の多いある夜のこゝろ<sup>(98)</sup>」という書き出しで始まり、相次いで書かれたこの 3 作品が、あたかも一種の 3 部作 (trilogie) であるかのような感を与える。しかし、この中でスペインを舞台にしているのは『箱と亡霊』のみである。

『箱と亡霊』でも、主要登場人物の出自には、ナポレオンとの戦争に参加したことで箔がついている。

ナポレオンを相手どってのあの崇高な戦いによって、19 世紀のスペイン人は後世ヨーロッパのあらゆる他の民族の上位におかれ、フランス人について第 2 位をあたえられるだろうが、この戦争中、ドン・ブラスはもっとも勇名をはせたゲリラ隊長の 1 人であった<sup>(99)</sup>。

しかし、1808 年から 1813 年のナポレオンのスペイン戦争に参加したにもかかわらず、ドン・ブラスにとってこの経歴は有利には働かない。ドン・ブラスは、「フェルナンド王が帰国すると、彼はセウターの徒刑場に送られ、そこで悲惨きわまる 8 年を送った。彼は若いころ托鉢僧であった。そして還俗した、それがいけないというのであった。そののち、どうい



きさつか判らないが、赦免されて帰国した<sup>(100)</sup>」という過去を持っているからだ。やがてグラナダの警察署長 となったドン・ブラス（正確には、ドン・ブラス・ブストス・イ・モスケラ）は、背が高く色黒で、恐ろしく痩せている風貌で独身の 45 歳である<sup>(101)</sup>。『パルムの僧院』のモスカとラッシを併せたような人物とでも言おうか。一方、ドン・フェルナンドは、その美貌が目を引き、ドン・ブラスによって逮捕されるブロンドの美青年で、父がドン・カルロス・クアルトの軍隊の旅団長だったという出自を持つ<sup>(102)</sup>。ドン・ブラスは、釈放の嘆願に来たフェルナンドの婚約者のドニャ・イネスの美しさ<sup>(103)</sup>に一目惚れし、ドン・フェルナンドの命を、年の離れたイネスとの結婚という形で贖わせる<sup>(104)</sup>。美しい若者への初老の男の嫉妬と愛と策略という、後に、『パルムの僧院』のモスカの中に具現する人物像の原型であるかのようなドン・ブラスは、妻に裏切られたことが判ると、『イタリア年代記』の『チェンチー族』（1837 年）の人物のように、イタリア的＝スペイン的なエネルギーの発露を見せてくれる<sup>(105)</sup>。スタンダールは誰の仕業かはっきりと書いているわけではないが、修道院に逃げ込んだドニャ・イネスが、ベッドの上で何カ所も短刀で刺されて発見され<sup>(106)</sup>、その後、ドン・フェルナンドもグラナダ広場で処刑（打ち首）されたという簡潔な最後で幕を閉じる<sup>(107)</sup>。だが、この中で端役ではあるが、イネスとは乳姉妹で親しい友であり、ドン・ブラスとの結婚後も小間使いとしての資格でイネスのそばに仕えるサンチャの存在は、『箱と亡霊』によりスペイン的雰囲気を与えるのに寄与している<sup>(108)</sup>。サンチャは自分より妻と親しいことに嫉妬するドン・ブラスに疎まれ、牢獄の囚人の解放を条件に暇を出される<sup>(109)</sup>。その後、たっぷりと年金をもらい、グラナダから半里のところにある、アルバラセンの小村で「アルプハレスの密輸業者<sup>(110)</sup>」（les contrebandiers des Alpujarres）がもたらすイギリスの美しい商品<sup>(111)</sup>で生計を立て、「アルプハレス山の猛者<sup>(112)</sup>」（les braves des monts Alpujarres）の中に恋人を持っている。プレイヤード版新版の注釈者は、「アルバラセン」とは、おそらくアルハンブラ宮殿正面のグラナダのジプシーが多く住んでいる地区、アルバイシン（Albaicín）地区であるとしている<sup>(113)</sup>。ジプシーの生業のひとつが「密輸業者」であり、「猛者」

というのも、山賊、追いはぎの類を意味し、これもまたジプシー稼業の他の面であることは明白である<sup>(114)</sup>。もちろん、ジプシーとつきあいがあるだけに機転の利く元小間使いという、土着のスペイン女性の出自は、フェルナンドを箱に入れてイネスの部屋を出入りさせるサンチョの役割上、必要だったのであろう。メリメに代表される他の作家と違い、スタンダールははっきりとジプシーを意味する《bohémien》などの語をここでは用いてはいないが、それ故一層、メリメの『カルメン』を彷彿とさせる件である<sup>(115)</sup>。『箱と亡霊』の端役サンチャのしたたかな生き方は、『ラミエル』の女主人公像に受け継がれ熟成されて再投影されているのではないだろうか。

スペインを舞台とした『箱と亡霊』と違い、『惚れ薬』の舞台はボルドーである。実際、当時スペインからフランスへ渡るのに、港町ボルドーへ船で行くというルートを利用して多くのスペイン人が入港していたようだ<sup>(116)</sup>。しかも、ボルドーはスタンダールが1829年9月8日にパリを発った「小旅行」の目的地でもあった<sup>(117)</sup>。そのことがどう作品の完成に関わっているかはともかく、『惚れ薬』の女主人公は曲馬団の男を追ってボルドーまで来た「美しいスペイン女<sup>(118)</sup>」である。この異国に来るスペイン女性のレオノールには、30もの年齢差がある年上の金持ちの夫がいる<sup>(119)</sup>。スペインを出自とするレオノールは、髪の色は描かれていないが、「黒味がちな目<sup>(120)</sup>」の持ち主である。ナポリの曲馬団の男メイラルは、メリメの『カルメン』でバスク出身のドン・ホセに、カルメンが、すぐに見抜かれるとはいえ、ジプシー故に偽の出自を操ってバスク語で話しかける場面のよう<sup>(121)</sup>、カタロニア語で「私はマルケシト軍の大尉です。心からあなたを愛しています<sup>(122)</sup>」と打ち明ける。ところがすぐに、スペインの習慣など全く知らないことに気づき、レオノールは、メイラルがスペイン人であることに疑いを抱くようになる<sup>(123)</sup>。レオノールの金と曲馬団の座頭の女房を連れてパリに逐電する一方で、メイラルはレオノールを一座の若い曲芸師に譲り渡す<sup>(124)</sup>。この男の口から、メイラルが、実は聖ドミンゴ島の出身で、主人のものを盗んだか、殺したかして、島を逃げ出してきた男であることが判明する<sup>(125)</sup>。この作品でも、フランスを舞台としながらも、

スペインを出自とする異国の美女レオノールとスペインを偽の出自と言い張るメイラルとの不釣り合いな恋愛は、あたかも「惚れ薬<sup>(126)</sup>」(un philtre)を飲まれたとしか説明がつかない、スペイン的情熱の物語である。この「惚れ薬」についても、怪しげな薬の調合にも長けていたジプシーのことを想起させる<sup>(127)</sup>。実際、メリメの『カルメン』でも、カルメンに入れあげ涙まで流す竜騎兵のドン・ホセに、カルメンが皮肉っぽく「竜の涙ってやつかしら！もらって惚れ薬(un philtre)でもつくりたいねえ<sup>(128)</sup>」という場面がある。かくして物語は、一旦は若いフランス人中尉リエヴァンに窮地を救われ、求婚されるも、説明しがたい「恐ろしい狂気<sup>(129)</sup>」(horribles folies)に囚われているレオノールは、結局修道院で尼になる方を選ぶ<sup>(130)</sup>。ドン・ホセから最後にもう一度やり直すことを懇願されながら、自由と死を選ぶカルメンのように<sup>(131)</sup>。

## \*

スタンダールにとってスペインとは何か。本稿はスタンダールがスペインについて書いたすべてを網羅し分析しようと試みたものではない。ここまでスタンダールの小説の登場人物の出自に、スペインがいかに関わっているかを中心に見てきた。かならずしもスタンダールの《善》を代表する人物の側だけでなく、スタンダールの《悪》を体現する人物もスペインというアウラをまとっている。小説の中で重要な働きをする人物ほど、それがプラスに働くかマイナスに働くかは別として、スペインというアウラを帯びているのだ。スタンダールにとってなぜスペインは重要なのか。それはスペインもまたスタンダールにとって、《オリент》を具現するものだからではないだろうか。《幻想のオリент》から《幻想のスペイン》へ<sup>(132)</sup>。イタリア的なものとスペイン的なものの同一視。アンベールの浩瀚な『自由の変貌』の中では数ページしか占めないが、「法廷新聞」との関係は非常に興味深い<sup>(133)</sup>。同じ《オリジン》を求めているも、本稿の目的はそこにはない。あくまでも小説の中の登場人物の出自としてのスペインという《オリジン》にこだわってみた。すでに『箱と亡霊』や『惚れ薬』

には、メリメの『カルメン』を彷彿とさせるものがある。

逆に、《オリジン》を持たない、《捨て子》としての出自を持つ女主人公ラミエルには、メリメの『カルメン』を《先取り》するものがある。『カルメン』を精読した後、スタンダールの未完の『ラミエル』を読み直すと、両者の類似点の多さに驚かされる。そのことを今ここで詳述する事はできないが、『ラミエル』という作品には、《スペイン》は隠されていて表面には出てこない。《隠されたスペイン》を解読するには、《ジプシー》というキーワードが必要となる。スペインをも含むスタンダールの《オリエント》観は、19世紀の《スペインブーム》を通して、『ラミエル』という作品の中に滔々と流れ込んでいるのではないか。『ラミエル』の前には、『箱と亡霊』や『惚れ薬』も一つの通過点に過ぎない。それを明らかにするには別の機会を俟ちたい。

※ 引用文は、基本的に邦訳のあるものはそれぞれの邦訳に従ったが、文脈によっては改訳を施したものもある。

※ 表記の統一上、引用文も含めて、漢数字は慣用的なもの以外全てアラビア数字に変更した。

#### 註

- (1) Josué Montello, *Un maître oublié de Stendhal*, Seghers, 1970, pp. 37-44.
- (2) *Dictionnaire de Stendhal*, Honoré Champion, 2003, pp. 253-255.  
また、スペイン継承戦争についても短い記述がある (*Ibid.*, pp. 326-327)。
- (3) 1830年は、スタンダールにとってだけでなく、文学、歴史、哲学、芸術などあらゆる面において重要な節目の年となっているのは言うまでもない。2006年3月のクロックのテーマが、《STENDHAL, LES ROMANTIQUES ET LE TOURNANT DE 1830》であり、大きな転回点である1830年に改めて焦点を当てているのは興味深い。
- (4) Stendhal, *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor Del Litto, Paris: Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 2 vol., 1981-82, t.II, p. 652.
- (5) 註<sup>(132)</sup>及び<sup>(133)</sup>を参照。

- (6) 「ジプシー」という呼称に差別的な意味があるとして現在では、「ロマ Roma」と総称的に呼ぶべきであろうが、19 世紀の文学作品を取り扱うというコンテクストの中ではあえて「ジプシー」という表現を使用した（参照：『「ロマ」を知っていますか——「ロマ/ジプシー」苦難の歩みをこえて』IMADR ロマプロジェクトチーム編集，反差別国際運動日本委員会発行，解放出版社，2003 年）。しかしながら水谷驍は、『ジプシー 歴史・社会・文化』（平凡社新書，2006 年）で，安易に「ロマ」という呼称に統一することへの疑念を呈している（同書，38-43 頁）。
- (7) Stendhal, *Napoléon*, Édition établie et présentée par Catherine Mariette, Stock, 1998, p. 190.
- (8) *Ibid.*, p. 99.
- (9) モームもまた 16-17 世紀にかけての「黄金世紀」に魅せられた作家の 1 人である（ウィリアム・サマセット・モーム『ドン・フェルナンドの酒場で サマセット・モームのスペイン歴史物語』（増田義郎訳，原書房，2006 年）。
- (10) ティエリー・レンツ『ナポレオンの生涯』（福井憲彦監修，遠藤ゆかり訳），創元社，1999 年，94 頁。
- (11) 立石博高，若松隆編『概説スペイン史』，有斐閣選書，1987 年，93 頁。
- (12) ティエリー・レンツ，前掲書，96-97 頁。
- (13) Stendhal, *De l'Amour*, édition présentée, établie et annotée par V. Del Litto, Gallimard, coll. «Folio», 1980, p. 169.
- (14) *Ibid.*, p. 169.
- (15) Stendhal, *Le Coffre et le revenant*, in *Œuvres romanesques complètes*, Édition établie par Yves Ansel et Philippe Berthier, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 2005-2007, t. I, p. 273.
- (16) *Ibid.*, p. 273.
- (17) Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, éd. Antoine Adam, Classiques Garnier, 1973, p. 103.
- (18) *Ibid.*, p. 106.
- (19) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. P.-G. Castex, Classiques Garnier, 1973, p. 3.
- (20) *Ibid.*, p. 3.
- (21) 「私生活に触れまいと思って，作者は，ヴェリエールという小さな架空の町をつくりだした。司教とか，陪審員とか，重罪裁判所とかが必要なときには，それらの舞台を，作者が一度も行ったことのないブザンソンにした」（傍点部，原文イタリック）とスタンダール自身、『赤と黒』第 2 部の最後に註の形で断りを入れている（*Ibid.*, p. 489）。

また、ヴェリエールの町のモデルについては、ガルニエ版校訂者カステックスの註及び序に詳しい (*Ibid.*, pp. XX-XXVII et pp. 515-516n.)。

- (22) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, in *Œuvres romanesques complètes*, t. 1, Pléiade, Gallimard, 2005, p. 1000n.
- (23) *Ibid.*, p. 15.
- (24) *Ibid.*, p. 41.
- (25) Stendhal, *Vie de Henry Brulard*, *op. cit.*, p. 255.
- (26) *Ibid.*, p. 829.
- (27) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. P.-G. Castex, Classiques Garnier, 1973, p. 532n.
- (28) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, in *Œuvres romanesques complètes*, t. I, Pléiade, Gallimard, 2005, p. 1019n.
- (29) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. P.-G. Castex, Classiques Garnier, 1973, p. 154.
- (30) *Ibid.*, p. 560n.
- (31) 「エルナニの戦い」については以下の文献を参照：ゴーチエ『青春の回想——ロマンチズムの歴史』（渡邊一夫訳），富山房百科文庫，1977年；井村実名子『フランスロマン派 1833年——ゴーチエの青春』，花神社，1985年。
- (32) 「今世紀は2歳だった！（…）そのころ，昔はスペインの町だったブザンソンに（…）青い顔，うつろな目，声もたてぬ子供が生まれた」（『秋の木の子』一）（辻昶，丸岡高弘『ヴィクトル＝ユゴー 人と思想』清水書院，1981年，19頁）。
- また，同じ1831年に，ユゴーは『ノートル＝ダム・ド・パリ』でジプシーの少女エスメラルダを描いていることも指摘しておきたい。
- (33) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. P.-G. Castex, Classiques Garnier, 1973, p. 225.
- (34) ノルベール伯爵が参戦したこの「スペイン戦争」は，ナポレオンの「スペイン戦争」ではなく，自由主義政府を倒壊させフェルナンド7世による王政を復古させるための戦いで，フランスは1823年に「聖ルイの10万の息子たち」と呼ばれる軍隊をイベリア半島に投入した（『概説スペイン史』，前掲書，104頁）。それゆえ，『赤と黒』のクロノロジーによれば，1829年に19歳のノルベール伯爵は，戦争当時12歳か13歳であったことになり，この戦争には行けなかったはずである（Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, in *Œuvres romanesques complètes*, t. I, Pléiade, Gallimard, 2005, p. 1066n.）。
- (35) *Ibid.*, p. 300.
- (36) *Ibid.*, p. 314.

- (37) バイレーンの戦いは1808年7月18日から22日にかけて行われた：「バイレールにおけるフランス大陸軍の降伏——スペインが反乱評議会を設置してフランスに宣戦を布告したとき、南スペインの港町カディスには、1805年のトラファルガー海戦で生き残ったフランス艦隊が封鎖されていた。その封鎖を解くためにデュボン將軍は軍勢をひきいてカディスに向かうが、反乱軍に行く手を阻まれて計画を断念する。さらに退却途中のバイレールでスペイン軍に包囲されてしまい、降伏を余儀なくされた。これは常勝を誇った大陸軍にとって、初の敗北となった。その後も戦闘は長引き、1813年にスペイン北部の都市ビトリアでウェリントン將軍ひきいるイギリス軍にフランス軍が敗北することで、ようやく終結する。結局この戦争が、ナポレオン政權を揺るがせる原因となった」(ティエリー・レンツ『ナポレオンの生涯』、前掲書、96頁)。

スタンダールの『ナポレオンの生涯』では、ナポレオンは、バイレールでの敗北の知らせを受け取って絶望して叫ぶ：「聖なる器を盗むこと、と彼は激昂して叫んだ、このことは規律の悪い軍隊だと考えられる、だが盗んだと署名するとは！」(Voler des vases sacrés, s'écria-t-il dans sa fureur, cela se conçoit d'une armée mal disciplinée, mais signer qu'on a volé!) (Stendhal, *Vie de Napoléon*, in *Napoléon*, op. cit., p. 93)

- (38) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. P.-G. Castex, Classiques Garnier, 1973, pp. 424-425.

- (39) *Ibid.*, p. 380.

ブストスを炭焼き黨員としているところにも、スタンダールらしい皮肉と同時に、スペインとイタリアの同一視がかいま見られるようでおもしろい。

- (40) 『恋愛論』第40章 (*De l'Amour*, op. cit., p. 135.) では、カバニスによって打ち立てられた気質の分類に従って、フランス人を多血質、スペイン人を胆汁質、オランダ人を粘液質としているが、「このスペイン人の(…)びくともしない粘液的気質」とあるように混同も見られる (*Ibid.*, pp. 629-630n.)。

- (41) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. P.-G. Castex, Classiques Garnier, 1973, pp. 380-381.

- (42) *Ibid.*, p. 629n.

- (43) Stendhal, *Racine et Shakespeare* (1818-1825), Établissement du texte, annotation et préface de Michel Crouzet, Honoré Champion, 2006, p. 493 et pp. 493-494n.

- (44) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. P.-G. Castex, Classiques Garnier, 1973, pp. 630-631n.

- (45) *Dictionnaire de Stendhal*, op. cit., pp. 253.

- (46) 鈴木昭一郎「年譜」(桑原武夫、鈴木昭一郎編『スタンダール研究』所収、

白水社, 1986年, 282頁)。

- (47) Robert Vigneron, *Études sur Stendhal et Proust. Recueillies par ses élèves en témoignages de leur reconnaissance*. Avant-propos de René Jasinski, Paris, Nizet, 1978, pp. 82-93.; Henri Martineau, *Le Calendrier de Stendhal*, Paris, Le Divan, 1950, pp. 241-242.
- (48) 高木信宏「『赤と黒』の創作過程——着想と制作時期の再検証——」『ステラ』第20号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2001年9月, 1-11頁。
- (49) Stendhal, *Journal (1818-1842)*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor Del Litto, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 2 vol., 1981-82, t. II, pp. 105-106.
- (50) Kosei Kurisu, 《Stendhal et la Gasette des Tribunaux》, *H.B. Revue internationale d'études stendhaliennes*, n° 3, 1999, pp. 143-147.
- (51) 高木信宏「『赤と黒』の創作過程——着想と制作時期の再検証——」, 前掲論文, 2頁。
- (52) 同上, 2頁。
- (53) 同上, 3頁。
- (54) Cf. Robert Vigneron, *Études sur Stendhal et Proust*, *op. cit.*, pp. 82-93.
- (55) 鈴木昭一郎「年譜」(前掲書, 318頁)。
- (56) スタンダール『南仏旅日記』(山辺雅彦訳), 新評論, 1989年; Stendhal, *Voyage dans le Midi de la France*, in *Voyages en France*, Textes établis, présentés et annotés par Victor Del Litto, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1992.
- (57) 鈴木昭一郎「年譜」(前掲書, 317頁)。
- (58) プレイヤッド版で, 約20ページほどである (Stendhal, *Voyage dans le Midi de la France*, *op. cit.*, pp. 654-671)。
- (59) スタンダール『南仏旅日記』, 前掲書, 133頁; Stendhal, *Voyage dans le Midi de la France*, *op. cit.*, p. 666.
- (60) スタンダール『南仏旅日記』, 前掲書, 56頁; Stendhal, *Voyage dans le Midi de la France*, *op. cit.*, p. 610.  
 フェルナンド7世の治下, カタルーニャでの反乱の抑圧をおこなったスペイン伯 (1775-1839) については, Stendhal, *Voyage dans le Midi de la France*, *op. cit.*, p. 1338n. を参照。
- (61) Cf. Robert Vigneron, *Études sur Stendhal et Proust*, *op. cit.*, pp. 87-90.
- (62) 立石博高, 若松隆編『概説スペイン史』, 前掲書, 104頁。
- (63) 同上, 104-105頁。
- (64) 同上, 105頁。



- (65) アントニオ・ドミンゲス・オルティス『スペイン 三千年の歴史』(立石博高訳), 昭和堂, 2006 年, 313 頁。
- (66) Robert Vigneron, *Études sur Stendhal et Proust, op. cit.*, p. 93.
- (67) 高木信宏「『ジュリアン』のアイデア」『ステラ』第 24 号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2005 年 12 月, 54-58 頁。
- (68) ヴェロン博士は, 1835 年までオペラ座の支配人にとどまる。その後, 「コンスチチューションネル」紙の編集主幹(後に全権掌握), 代議士と様々な転身で時代を駆け抜ける(参照: 鹿島茂『かの悪名高き——十九世紀パリ怪人伝』, 筑摩書房, 5-50 頁)。
- (69) これらの点に関しては, 以下の拙論を参照されたい——「スタンダールと舞踊」『中部大学人文学部研究論集』第 1 号, 1999 年 1 月, 1-29 頁。  
また, ファニー・エルスレールと「カチューチャ」については, この論考の続編である「スタンダールとスペイン II」で『リュシアン・ルーヴェン』を扱う際に改めて詳述する。
- (70) 「1829 年 12 月 3 日。私は『ヴァニナ・ヴァニニ』をヴェロン氏に送る」(*December, the third, 1829. I send Vani [na] Vani [ni] to M.Vér [on].*) (Stendhal, *Journal (1818-1842)*, *op. cit.*, t.II, p. 107)。
- (71) Stendhal, *Vanina Vanini*, in *Œuvres romanesques complètes*, t. I, Pléiade, Gallimard, 2005, p. 247.
- (72) ヴァニナの髪については, 「目の輝きと漆黒の髪(美しい黒髪)がローマ人女性であることをはっきり示していた 1 人の若い娘」(Une jeune fille que l'éclat de ses yeux et ses cheveux d'ébène proclamaient Romaine (...)) (*Ibid.*, p. 247) とか「この黒髪の若い娘」(cette jeune fille aux cheveux noirs) (*Ibid.*, p. 247) と形容されている。
- (73) 鈴木昭一郎「年譜」(前掲書, 293 頁)。
- (74) 《Les beaux cheveux blonds de la princesse étaient un peu en désordre; ses grands yeux bleu foncé étaient fixés sur lui: leur expression était douteuse.》(Stendhal, *San Francesco a Ripa in Chroniques italiennes*. Introduction, chronologie, établissement du texte, notes, archives de l'œuvre et index par Béatrice Didier. Paris, Garnier-Flammarion, 1977, p. 275)
- (75) 《(...) elle est blonde dans un pays où toutes les femmes sont brunes: c'est une grande distinction.》(*Ibid.*, p. 276)
- (76) Stendhal, *Vanina Vanini*, *op. cit.*, p. 249.
- (77) *Ibid.*, p. 932n.
- (78) 『パルムの僧院』の主要登場人物ではないが, パルムの宮廷の「陰謀家」, ラヴェルシ侯爵夫人は, 「真っ黒な髪をした男勝りの女」(grande virago aux

cheveux fort noirs) (Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, op. cit., p. 124) で、美女どころか「どこから見ても醜い」(régulièrement laide) (*Ibid.*, p. 124) 女性として描かれる。官能性といったものは排除されているが、倦まず陰謀を企む活力が、パルムの「宮廷で最も美男子のバルディ伯爵」(*Ibid.*, p. 124) を愛人にさせているのだろうか。

- (79) ウィルキー・コリンズ『白衣の女 I』(中西敏一訳), 国書刊行会, 1978 年, 41 頁。

妹の方は、正反対の《fragile》な美人で「髪の毛は非情に淡い褐色であって——亜麻色ではないがそれとほとんど同じように明るく、金色ではないがそれとほとんど同じように光沢があり——」(同書, 62 頁) と描写され、目の方も「瞳の色は、しばしば詩人によって歌われ、現実にはほとんど見ることのない、あの柔らかい、澄んだ青緑色である」(同書, 62 頁)。

- (80) 村田京子『娼婦の肖像——ロマン主義的クルチザンヌの系譜』, 新評論, 2006 年, 137 頁。

- (81) アルマン스는「濃い青色の大きな目」(de grands yeux bleus foncés) (Stendhal, *Armance*, in *Œuvres romanesques complètes*, t. I, Pléiade, Gallimard, 2005, p. 115) をもち、「この若い娘の顔だちにはどこかアジア的なところがあった」(On trouvait quelque chose d'asiatique dans les traits de cette jeune fille (…)) (*Ibid.*, p. 116) と言われる。

- (82) 「アルマン스가、モスクワ流に、髪を短くして頭の周囲に大きなカールをつくって垂らす髪型ばかり結っていることが、とかくの非難をあびていた」((…) on attaquait la prédilection d'Armance pour les cheveux courts et retombant en fort grosses boucles autour de la tête, comme on les porte à Moscou.) (*Ibid.*, p. 121)。

- (83) 「社交界で最も美しい大きな黒い目」(de grands yeux noirs les plus beaux du monde) (*Ibid.*, p. 89) と「彼の最も美しいブロンドの髪」(Ses cheveux du plus beau blond) (*Ibid.*, p. 105) といずれも最上級の賛辞で描かれる。

- (84) 「すばらしいブロンドのひどく姿のよい若い女性」(une jeune personne extrêmement blonde et fort bien faite) (Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. P.-G. Castex, Classiques Garnier, 1973, p. 569) ; 「彼女の天上のごとき青色の大きな目」(ses grands yeux d'un bleu céleste) (*Ibid.*, p. 607)。

- (85) 「大きな黒い目」(De grands yeux noirs (…)) (*Ibid.*, p. 364), 「濃い栗色の髪」(Des cheveux châtain foncé (…)) (*Ibid.*, p. 364)。

- (86) 「クレリアは銀白色のブロンドの髪をしていた」(Clélia avait des cheveux blond cendré (…)) (Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, op. cit., p. 286)。

- (87) 『パルムの僧院』に関する『パリ評論』に掲載されたバルザックの評論への

お礼として書かれた、バルザック宛書簡の草稿の中に、「サンセヴェリーナ公爵夫人にかんする多くの文章はコレッジョから写しました」(Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, Édition critique contenant les notes et additions de Stendhal, Texte établi à partir de l'édition originale présenté et annoté par Michel Crouzet, Paradigme, 2007, p. 569) という件がある。そしてサンセヴェリーナ公爵夫人の具体的イメージは、特に、現在ルーヴル美術館所蔵の『聖女カタリナの神秘の結婚』に求められる (Cf. Dominique Fernandez, *Le Musée idéal de Stendhal*, Œuvres et citations choisies par Ferrante Ferranti, Stock, 1995, pp. 146-147)。そこに描かれている女性の髪は、褐色と言うよりやや濃いブロンドである。

- (88) Stendhal, *Lucien Leuwen*, Texte établi, présenté et annoté par Michel Crouzet, Le livre de Poche, 2007, p. 96 et p. 512.
- (89) Cf. Jean-Paul Weber, *Stendhal. Les Structures thématiques de l'œuvre et du destin*, Sedes, 1969, 665p.; Cheryl M. Hansen, *Color Symbolism in the Works of Stendhal Le Bleu et le Vert*, The Edwin Mellen Press, 2006, 214p.
- (90) 北方と南方の人間と《クリマ》との関係については、南玲子と19世紀に書かれたボンステッテンの以下の論考から大いに示唆を得た：南玲子「スタンダールによる「ヨーロッパ人研究」の起源」『年報 地域文化研究』第4号(2000年度), 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要, 2001年3月, 201-216頁；南玲子「観察の旅と研究者——フランス民俗学の黎明期」『Résonances』第2号(2003年度), 東京大学大学院総合文化研究科フランス語系学生論文集, 2004年3月, 62-68頁；Charles-Victor de Bonstetten, *L'Homme du Midi et l'homme du Nord ou l'influence du climat*, Édition de l'Aire, Lausanne, 1992, 147p.
- (91) 第2部の『スタンダールとスペインⅡ』では、最晩年の作『ラミエル』において捨て子としての出生を持つヒロインを、スタンダールにおいても典型的な《cliché》とも言える青い目とブロンドの髪の美女にしたことは、作品解説の重要な要素の一つであることを論証する。
- (92) 《L'Espagne se trouve au premier plan de l'actualité, entre 1827 et 1830.》(Henri-François Imbert, *Les métamorphoses de la liberté ou Stendhal devant la restauration et le risorgimento*, Slatkine Reprints, 1989, p. 457).
- (93) シュテファン・コッペルカム『幻想のオリエント』(池内紀, 浅井健二郎, 内村博信, 秋葉篤志訳), 鹿島出版会, 1991年, 101頁。
- (94) Cf. François-René de Chateaubriand, *Les Aventures du dernier Abencerage*, in *Atala René Les Aventures du dernier Abencerage*, Édition présentée, établie et annotée par Pierre Moreau, Gallimard, 1971, pp. 183-

241.

- (95) スタンダールの脳裏にスペインが入り込むのは、1829年のスペイン「小旅行」からパリに戻ってきた後であると結論づけた上でヴィニユロンは、スタンダールをシャトーブリアンになぞらえている (Robert Vigneron, *op. cit.*, p. 93)。
- (96) 註(71) 参照。
- (97) Stendhal, *Le Coffre et le Revenant*, in *Œuvres romanesques complètes*, t. I, Pléiade, Gallimard, 2005, p. 273.
- (98) Stendhal, *Le Philtre*, in *Œuvres romanesques complètes*, t. I, Pléiade, Gallimard, 2005, p. 333.
- (99) Stendhal, *Le Coffre et le Revenant*, *op. cit.*, p. 274 ; 「ナポレオンを相手どってのあの崇高な戦い」とは、もちろん1803年から1813年のものである (Cf. *ibid.*, p. 937n.)。
- (100) *Ibid.*, p. 273 ; フェルナンド王とは、フェルナンド7世のこと (*Ibid.*, p. 937n.)。
- (101) *Ibid.*, pp. 273 et 276. このプレイヤッド版の新版では、他の版が43歳としているのに対して、ドン・ブラスの年齢を45歳としている。
- (102) *Ibid.*, p. 274.
- (103) ドン・フェルナンドについては、ブロンドの美青年とのみ描かれ、ドニャ・イネスについては、その美しさへの言及はあるものの、具体的な記述はない。スペイン人ということで、黒い目、黒髪の美女を想像すべきだろうか？
- (104) *Ibid.*, pp. 275-277.
- (105) 前述のアンベールは、スペインは、イタリア以上に情熱の地であるとも言っている (Henri-François Imbert, *op. cit.*, p. 457)。
- (106) Stendhal, *Le Coffre et le Revenant*, *op. cit.*, p. 292.
- (107) *Ibid.*, p. 292.
- (108) *Ibid.*, p. 278.
- (109) *Ibid.*, pp. 278-279.
- (110) *Ibid.*, p. 281.
- (111) *Ibid.*, p. 281. メリメの『カルメン』でも、ドン・ホセが、カルメンに唆されイギリスからの商品の密輸に手を染める (Prosper Mérimée, *Carmen*, Le Livre de Poche, 1996, p. 117)。
- (112) Stendhal, *Le Coffre et le Revenant*, *op. cit.*, p. 281.
- (113) *Ibid.*, p. 937n. 「アルバイシン地区の東には洞窟住居が並びジプシーが多く住んでいたサクラモンテ地区が隣接している」 (関哲行編『世界歴史の旅 スペイン』, 山川出版社, 2002年, 124頁) とあるように、実際にはサクラモン

テ地区の方がジプシー居住区として現在も知られているが、「隣接」している以上、ジプシーがアルバイシン地区にも多く出入りしていたことは容易に想像できる。洞窟住居が広がるサクラモンテ地区では「伝統的なヒターノの踊りであるサンブラ（ヒターノの結婚式での伝統的な歌や踊りで構成される）を披露する洞窟のタブラオ（フラメンコを見せる酒場）があることで知られている」（同書、15頁）。

- (14) 18世紀末にハインリッヒ・グレルマンは、『ジプシー——ヨーロッパにおけるこの民族の生活と経済、習慣と運命、ならびにその起源にかんする一試論』（1783年、フランス語版は1788年）を著し、ジプシー像を「科学的」に検討したと主張した（水谷驍『ジプシー 歴史・社会・文化』、前掲書、60頁）。その中で、グレルマンは、ジプシーの職業として楽士や密輸などを挙げ、とりわけ「ジプシーが「乞食と泥棒」であることを「科学的」に証明した」（同書、63頁）。

- (15) スタンダールの小説作品では唯一『リュシアン・ルーヴェン』で、ジプシーではないが、ボヘミアのホルンに言及している箇所がある：《Il y avait ce soir-là, au café-hauss du *Chasseur vert*, des cors de Bohême qui exécutaient d'une façon ravissante une musique douce, simple, un peu lente.》（Stendhal, *Lucien Leuwen*, in *Œuvres romanesques complètes*, t. II, Pléiade, Gallimard, 2007, p. 259）。

この部分は、人文書院版の『スタンダール全集』では、「その宵は《緑の獵人》亭のカフェ・ハウスで、ジプシーのホルン奏者たちが、甘く素朴な、ちょっとテンポのゆるい音楽を、うっとりするように吹奏していた」と訳されているが、《des cors de Bohême》は「ジプシーのホルン奏者たち」でなく「ボヘミアのホルン」と訳すべきではないだろうか。大文字か小文字かは別としても、《bohême》や《bohémien》ではないので、この訳には疑問が残る。もちろん、この「ボヘミアのホルン」を吹いているのが当然《ジプシー》であるという解釈を否定するものではない。

- (16) 『惚れ薬』の女主人公レオノールの夫も、フランスに渡るのにフランスの小型の帆船フリックを利用してボルドーにやって来ている（Stendhal, *Le Philtre*, op. cit., p. 339）。
- (17) 《8 septembre 1829, for Bord [eau] x.》（Stendhal, *Journal (1818-1842)*, op. cit., p. 105）。
- (18) Stendhal, *Le Philtre*, op. cit., p. 335.
- (19) *Ibid.*, p. 337.
- (20) *Ibid.*, p. 336.
- (21) Prosper Mérimée, *Carmen*, op. cit., pp. 98-100.

- (122) Stendhal, *Le Philtre*, *op. cit.*, p. 339.
- (123) *Ibid.*, p. 344.
- (124) *Ibid.*, p. 345.
- (125) *Ibid.*, p. 345. 聖ドミンゴ島は、中央アフリカのハイチの旧名。島の西側 3 分の 1 はフランス領だった。
- (126) *Ibid.*, p. 345.
- (127) 「ジプシーのなかでも女性は、植物を薬として使うことについて、豊富な知識と経験をもっている」(相沢好則『ジプシー——受難漂泊の自然児——』, 新地書房, 1989 年, 103 頁)。
- (128) Prosper Mérimée, *Carmen*, *op. cit.*, p. 113.
- (129) Stendhal, *Le Philtre*, *op. cit.*, p. 346.
- (130) *Ibid.*, p. 346.
- (131) Prosper Mérimée, *Carmen*, *op. cit.*, p. 138.
- (132) スタンダールと《オリエント》については以下の拙論を参照されたい：『スタンダールとオリエント』愛知産業大学短期大学紀要第 14 号, 2001 年 11 月, 131-150 頁；『スタンダールとオリエント ～スタンダールの小説作品における《オリエント幻想》～』日本フランス語フランス文学会中部支部編「研究報告集」第 27 号, 2003 年 3 月, 21-34 頁。
- また、フィリップ・ベルティエも、スタンダールのスペインは本質的に想像上のものであり、ロマンティックなスペインは、まさにヨーロッパにおけるオリエントであると指摘している (Stendhal, *Le Coffre et le revenant*, *op. cit.*, pp. 934-935)。
- (133) Henri-François Imbert, *op. cit.*, pp. 457-463.

(受理日 平成 19 年 12 月 23 日)